

エゴン・シーレ展を観る

2023年3月27日 虎長

3月になり、あちこちの新聞やラジオで本展が「4月9日に終わるよ」と急かすように紹介された。3月23日に当日券で待たされずに入場できた。花見時の上野も雨のため人出は驚く程でなく、会場＝東京都美術館の混み具合もまあまあ。僕がまだ訪れたことのないウィーンのレオポルド美術館から120点の出展で、作品はシーレに限らず、予想より大規模で期待以上に堪能できた。

はじめに:

1)シーレ(1890～1918)は、ウィーン世紀末を代表する画家としてクリムト(1862～1918)とココシュカ(1886～1980)と並び称されることが多い。僕はクリムト目当てで訪れたウィーンのベルデヴェーレ宮殿で、シーレの有名な『死と乙女』に衝撃を受けたのだった。今回の展示会を機に、この3者の共通点・差異を復習できた。シーレは師事したクリムトから装飾性を継承しながら、それを脱して表現主義の先駆けとなる。シーレとココシュカとの直接の接点は不明だが、過激な表現という点が共通する。『死と乙女』はココシュカの『風の花嫁』(ココシュカとアルマ・マラーを描いたという)に影響を受けた、といわれている。



Fig1 クリムト『接吻』 Fig2 シーレ『死と乙女』 Fig3 ココシュカ『風の花嫁』
(Fig1～3は本展出品ではないが参考まで)



Fig4 シーレ『芸術家の母(マリー・シーレ)の肖像』



Fig5 シーレ『装飾的な背景の前に置かれた様式化された花』



Fig6 シーレ『菊』

2)また、僕がある誤解をしていたことが分った。シーレは生(性)と死を強く意識した過激な絵と28歳で亡くなったことから、不幸な一生を送ったと想像していたのだ。晩年には成功と名声を得ており、夭折は不運だが、その一生は不幸ではなかったようだ。もう一つの誤解は、強烈な表現からシーレが精神を病んだことがあると勝手に推測していたが、それはなかったようだ。その点、精神を病んだゴッホや、一時期精神病院に入院したムンクと異なる点だ。作品を伝記的に解釈するのではなく、作品そのものを見るべしというのが近年の美術史の主流であるが、シーレの場合は自作の詩と手紙を沢山残し、本展示会場でもその数節がパネルに引用されているように、やはり彼の一生と作品との関係は無視できない。

3)人物画が注目されるシーレは静物画、風景画も沢山描いているということも新たに認識した。

第1章 エゴン・シーレ ウィーンが生んだ若き天才

両親はエゴンが画家になるに反対、裕福な叔父ツィハチェックも反対していたが、後にエゴンをサポートするようになる。展示されたエゴン17歳の時の絵3点は、どれも高い画才を表している。その中の一つが Fig4『芸術家の母(マリー・シーレ)の肖像』(1907)。

第2章 ウィーン1900 グスタフ・クリムトとリング・シュトラウゼ

ウィーン分離派のコロマン・モーザーの切手オリジナル・スケッチ、クリムトの油彩画。僕の興味を引いたのはカール・モルの日本の版画に影響を受けという木版画。

第3章 ウィーン分離派の結成

分離派メンバーによる分離派展のリトグラフ・ポスターとともに、シーレの植物画が展示されていた。

人物画ばかりが注目されがちなシーレは、植物や民芸品の生物画も多く描いている。18歳で描いた Fig5『装飾的な背景の前に置かれた様式化された花』(1908)の平面的構図、金銀の使用による装飾性はクリムトの影響であるが、後に人間を植物的に、植物を人間的に描くようになることを予見させる。Fig6『菊』(1910)は題材に日本の、様式にアール・ヌーボーの影響があるという。

第4章 クリムトとウィーンの風景画

ストール、ブラウエンシュタイナー、エッガーレン＝リンツ、ファイスタウアーなど、僕が今まで知らなかった画家、またカール・モル、クリムトの風景画が展示されていた。人物画の多いクリムトの風景画は珍しいが、このFig7『シェーンブルン庭園風景』(1916)はクリムト唯一のウィーン風景とのこと。これらの分離派による風景画はすべて厚塗りだが、シーレのFig8『山腹の村』(1907)も分離派的厚塗りの絵だ。



Fig7 『シェーンブルン庭園風景』



Fig8 シーレ『山腹の村』



Fig9 モーザー『洞窟のヴィーナス』



Fig10 ゲルストル『半裸の自画像』



Fig11 シーレ『ほおずきの実のある自画像』



Fig12 シーレ『自分を見つめる人 II(死と男)』

モーザーはウィーン分離派、ウィーン工房に在籍したデザイナーであり、画家であった。Fig9『洞窟のヴィーナス』(1914 頃)は代表作だが、青と黄色の色調と、ヴィーナスの決然とした姿からは妖艶さが感じられない。スイスの人物かの大家ホドラーの影響を受けたようだ。そう言えば、シーレもホドラーの影響を受けたということどこかで読んだ記憶がある。僕も昔、チューリッヒの美術館でホドラーの作品を沢山観たことがあり、なるほどと頷ける。

第6章 リヒャルト・ゲルストル 表現主義の先駆者

本展を観るまで、僕はゲルストルのことを知らなかった。内面の精神を表す表現主義の先駆者とのことだ。Fig10『半裸の自画像』(1902/4)を受難のキリストに重ねているという。親しくなった作曲家シェーンベルグの妻マティルデと恋愛関係となり、彼女が夫の元に帰った直後、25歳で自殺。

第7章 エゴン・シーレ アイデンティティーの探求

1900年代ウィーンでは「自我」が研究・議論された。シーレは自画像を200点も残している。本展のポスターでもあるFig11『ほおずきの実のある自画像』(1912)は、意外と小さな絵だった。顔全体と目の方向が反対を向いており、自身と不安を示す。顔に多色が塗られているのが特徴的。顎と肩を結ぶ対角線もシーレ独特のポーズ。ほおずきの赤い実は生命体を表す。シーレは自己のアイデンティティーを不動の実態としてではなく、いろいろに演じ分けている。Fig12『自分を見つめる人 II(死と男)』(1911)は、エロス(生)とタナト(死)が共存する自己の二重性を表す。シーレは子ども時代に父と姉を亡くし、彼より前に二人が死産で、脅迫的な死への不安を抱えていた。

第8章 エゴン・シーレ女性像

モデルとしてクリムトから譲り受けたヴァリー・ノイツェルとは1911年～1915年の間、恋人関係にあった。Fig13『悲しみの女』(1912)の女はヴァリーで、その悲しみの原因である？後ろに顔を少し見せている男はシーレ自身なのにヴァリーの赤毛。他社と自己の入れ替えをしている。左上のしおれかかった赤い薔薇は殉教を示す。アイコン構図のFig14『母と子』(1912)の母は痩せこけて死を感じさせる一方、子は恐怖心をあらわにしている。

第9章 風景画

Fig15『吹き荒れる風の中の秋の木(冬の木)』(1912)では自然が擬人化されている。シーレ独特の筋拘縮を起こしたかのような人物像と似かよる。枝は神経系の様だ。Fig16『モルダウ河畔のクルマウ(小さな街 IV)』(1914)のクルマウはシーレの母の故郷、現チェコのチェスキー・クルムロフで、シーレはここをウィーンよりも愛して何度も訪れた。僕も観光で一度行ったことがあるが、中世のままのような街だ。この絵では、建物を平面的に、しかも配置や配色委は自由に組み合わせている。元になる風景の素描も展示されていたが、より写実的だった。



Fig13 シーレ『悲しみの女』



Fig14 シーレ『母と子』



Fig15 シーレ『吹き荒れる風の中の秋の木(冬の木)』



Fig16 『モルダウ河畔のクルマウ(小さな街 IV)』



Fig17 ココシュカ『ピエタ「殺人者、女たち」のポスター』

第10章 オスカー・ココシュカ “野生の王“

強烈な印象を受けたのは、Fig17『ピエタ「殺人者、女たち」のポスター』(1909)。ココシュカ自身が創作した戯曲のためのものという。

第11章 エゴン・シーレと新芸術集団の仲間たち

省略

第12章 ウィーンのスロン文化とパトロン

シーレは、オスカー・ライヒェル、アルトゥール・レスラー、フランツ・バウアーなどのコレクター、パトロンに恵まれた。恋人と別れ、と結婚した頃と第一次大戦に従軍(戦地には赴かず)の頃から作風が自然主義的、写実的に変化した。シーレのパトロンの一にもなった、従軍時代の上官将校を描いた、1917年の Fig 18『カール・グリュンヴァルトの肖像』(1917,豊田市美術館蔵)に、その傾向が見てとれる。

第13章 エゴン・シーレ 裸体

ここでは、紙に鉛筆または黒チョークとグワッシュ(不透明な水彩絵具の一種で、顔料をアラビアガムの水溶液で練ったもの)で描いた素描がほとんど。Fig 19『頭を下げてひざまづく女』(1915)はなんとも挑発的だ。狙いはエロティシズムでなくセクシュアリティだった、との指摘がある。

第14章 エゴン・シーレ 新たな表現、早すぎる死

シーレは、友人の画家と自分の妹が結婚すると、ヴァリーを相手としてふさわしくないと考え、身をかためるために中産階級のエーディットと結婚する。破天荒なシーレとしては常識人の選択だ。しかし、結婚後も、ヴァリーと恋人関係続けることをヴァリーに提案して断わられているから、やはり常軌を逸している。エーディットの姉とも深い関係を持った、という。妻を描いた Fig20『縞模様のドレスを着て座るエーディット・シーレ』(1915)は、写実的である。1918年、妊娠6ヶ月のエーディットはスペイン風邪で亡くなり、エゴンも3日後にスペイン風邪で亡くなる。同じ年にクリムトも亡くなっている。Fig21『横たわる女』(1917)はエーディットをモデルとし、顔は他の人のものに置き換えたという。肉感、ホドラーの影響を受けていると僕には思われる。ふくよかなエロティシズムを感じさせる。



Fig 18 シーレ
『カール・グリュンヴァルトの肖像』



Fig 19 シーレ
『頭を下げてひざまづく女』



Fig20 シーレ
『縞模様のドレスを着て座るエーディット・シーレ』



Fig21 シーレ『横たわる女』

終わりに:

本展では触れていなかったことで、シーレの同時代人との関わりを調べてみた。シーレが16歳でウィーン美術アカデミーに最年少で合格した翌年と翌々年に、ヒトラーも受験して落第している。もちろん、ヒトラーとの関わりはないわけだが、シーレの死後10年以上たってからシーレの画がナチスにより、退廃芸術とされたことに思いを巡らせてしまう。詩人のリルケもシーレも1910年代にベルリン、ウィーン、ミュンヘンで活動していたが、二人が交流した記録はない。哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインはシーレより一歳年長でウィーン育ちであるが、接点はなかったようだ。ヴィトゲンシュタインの父カールはウィーン分離派を助け、ココシュカに寄付もしている。ルートヴィヒはパトロン活動を引き継いだが、ココシュカもシーレをも無視したらしい。シーレは内向的な分裂気質と自己顕示的な特徴を持つ性格であったと今では診断されるそうだが、精神を病んでいたわけではないから、指揮者・作曲家のマーラーのように精神科医のフロイトに相談に行くこともなかっただろう。クシーレはクリムトに「才能がありすぎる」と評されたそうだが、母親への手紙にシーレは「間違いなく僕は最も偉大で、最も美しく、最も純粋で、最も価値ある果実(人物)となるでしょう」と書いた。生活面でのスキャンダルはともかく、創作活動では、その通りになったといえるかもしれない。

以上